芝居せんべい

村松友視

Tomomi Muramatsu

書下し文芸作品

芝居せんべい

村松友視

文藝春秋

芝居せんべい

©Tomomi Muramatsu 1993 Printed in Japan ISBN 4-16-314120-0

平成五年七月二十日　第一刷
（定価はカバーに表示してあります）
著　者　村松友視
発行者　阿部達児
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三一二三　電話代表（〇三）三二六五一一二一一
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社
万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。小社営業部宛お送り下さい。
装　画　加藤栄三「空」　岐阜県美術館所蔵
装　丁　菊地信義

芝居せんべい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

隅田川を浅草の吾妻橋あたりから船で下り、両国橋、新大橋、永代橋というふうにくぐって、前方に石川島の造船所が見えてくると、あれが佃島だなと分る。それをながめながら運河を左へ入ってゆけば、越中島から蛤町を経て、門前仲町あたりの裏を流れる川へつながっている。川といっても運河のつづきだが、いつの日からか大横川という名がついた。しかし、その界隈に住む古老にたずねても、

「川の名前、そんなものは知らないね……」

川の名なんぞはあとから誰かが勝手につけるものだといわんばかりに、素っ気ない言葉が返ってくるばかりだ。それでも、大横川に架る橋には、上から巴橋、石島橋、黒船橋、

越中島橋、練兵衛橋という名がついている。その石島橋を海側へ渡ったところに、赤い屋根をした十三階建のマンションが建ったとき、近所の人々は顔をしかめたというが、そんな取沙汰も時が経って、塵がおさまるように消えてしまった。

石島橋のあたりは、川がそのまま貯木場になっていて、いつ使われるのかと思うような材木が、いつまでも水に浮いていることがあった。だが、近ごろでは防災用の土手をつくるため、貯木はあらかた取り払われてしまった。

このへんまで鯖の大群がのぼってきて、界隈の人々が石島橋から釣糸をおろし、大騒ぎをして釣り上げていたことがあった。あのときはそれが新聞ダネにもなったものだが、このところあまりにぎやかな話題がない。

(俺はなぜこんなところへやって来たのかな……)

運河の水面にぼんやりと目を投げていた元治は、ぶるっと身ぶるいをして鼻をこすりあげた。秋が深いというのに、このところ生あたたかい風が吹きつづけ、油断をして風邪をひきかけているのか、かるい寒けをおぼえていた。

(それにしても、俺も下町的な仕種が板についたもんだ)

鼻をこすりあげたとき、ふとそんな呟きが軀に湧いた。土地に生れ育ったわけでもない

のに、このあたりに吹いている風に一年ほどさらされているうち、メッキのように下町っ子らしい仕種が身についた。

「でもさ、元ちゃんのはいい意味での付け焼刃ってやつでね」

この界隈の風がしみついた六さんにそう言われるたび、元治は思わず頭を掻いてしまうのだった。よそ者である上に、六さんや清さんとは年齢が倍近くもちがう。それなのに友だちづき合いをさせてもらっているのを、これでいいのかなと思うことがたまにあった。だが、六さんや清さんと一緒に茜屋で飲んでいるときは、そんなことを忘れ互角の友だちになって、気持よく時を過すことの方が多かった。

石島橋の中央に立っている元治は、そこから見える茜屋の障子が開いて、六さんと清さんが手を振るのを待っていたのだが、いつまでたってもそのけはいがないので、仕方なく歩きはじめた。石島橋のとっつきにある茜屋は、「あそこで何時」といえば分る三人の待ち合せ場所になっていて、土曜と日曜の夕方は、よほどのことがないかぎりそこでぐだぐだとするのだった。

「何だ、やっぱり中にいたんですか……」

茜屋の引き戸を開けると、奥の座敷にいた六さんと清さんが、いたずらっぽい目で元治

を見た。元治は、うらみがましい顔をつくって二人を交互にながめた。
「いやね、どうせ橋の上に立ってるんだから、合図してやればって言ってるのに、きょうはいたずらをするんだって、障子を薄目に開けてずっと覗いてるんだから」
茜屋の親方がそう言って元治をなだめると、うしろにいたおかみさんが、親方と同じような表情で目をしばたたいた。
(夫婦は顔が似てくるっていうけど、この二人は双生児(ふたご)みたいだな……)
元治は、いつもそう思って茜屋の夫婦をながめるのだった。小料理屋、といってもビールにおでん、それにオムレツや焼魚といった程度で、何という自慢料理もなかった茜屋が、最近スッポンを出すようになった。
「スッポンの生き血、元気が出ますよ」
親方はさかんにそう言うのだが、元治も清さんも六さんもその誘いにはのらず、ビールに新香という線をくずそうとしなかった。歓迎すべき客でないにはちがいないのだが、親方もおかみさんも機嫌よく三人を迎え入れている。芝居好きの六さんに言わせれば、人生の吹き溜りへ集った塵みてえなタイプだからお互いに気心が知れるんだろうよ……ということになるらしい。

「ねりべい小路だね」
六さんが、好きな芝居だという「天保六花撰」の河内山宗俊にでもなったつもりか、一座を見わたして頭目ふうに眼玉を剝き、大袈裟な見得を切ってそう言ったことがあった。元治は、歌舞伎にはからきしうとい方なのだが、六さんのせいで近ごろはたまに役者のような目配りをするようになっていた。元治は、年輩者からのこんな影響を新鮮に感じているのだった。
(男親と一緒に育たなかったからな……)
元治は、六さんや清さんとのつき合いを思うたびに腹の底に生じるそんなセリフが、暗い色をおびないうちに呑み込むのだった。
「しかし何だねえ……」
尻を少しずらし元治が坐る場所をつくってから、六さんは根元まで吸ったタバコを灰皿に押しつけ、下から覗き上げるような目になった。
「インテリ元ちゃんも、ここから障子を薄目に開けてさ、橋に立ってるところなんぞを遠目にながめるってえと、ずいぶんと爺むさい若者なんだと思ってさ」
「インテリ元ちゃんはやめてくださいよ」

「いや、こいつは我ながらいい渾名だと思うよ。インテリったって、いい意味でのインテリであってだね」
「それに、若者ったってもうじき三十五ですよ」
「何を言やがる、俺っちから見りゃあ若者っていうかガキっていうか、まだまだ小便垂れ小僧だよ、なあ清ちゃん」
「それを言うなら鼻垂れ小僧だろ」
清さんが、はじめて口をひらいた。無口というのでもないが、清さんは六さんにくらべて受け身のタイプだ。ポンポン喋る六さんの言葉に誘われて話を弾ませることはあっても、自分から切り出すことはめったになかった。サーブとレシーブ……うまい組合せだと元治は二人のありように感心していた。
「清ちゃん、鼻垂れ小僧にも満たねえってニュアンスをだね、小便垂れ小僧って言い方にからめてる俺のセンスが分らなくちゃ困るじゃねえか」
「最近、少し片仮名が多くない？」
「へ……」
「インテリやらニュアンスやらセンスやら、こっちは学がないんだからくたびれるよまっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

たく」
「そいつは悪かった。悪かったがね、さっき元ちゃんが爺むさい若者だって言ったのは清ちゃんなんだからね、そこんとこお忘れなく」
「そうだったっけ？」
「これだ、年寄りはいやだねえ。自分の耄碌まで武器にするんだから」
「そいつはお互いだろ」
「ちげえねえ」
六さんと清さんは愉快そうに笑い合った。元治は一緒に笑いかけたが、途中で表情をもどした。お互いを「ちゃん」づけで呼び合うこの二人には、年を取っての衰えを明るく笑いに供しているといった風情があり、その仲間へ入るのはおこがましいと思ったのだった。
「しかし、インテリ元ちゃんがもうじき三十五か……で、誕生日はいつなの？」
六さんは、話の筋道を忘れているわけじゃないんだよというふうに、ぐいと顎をしゃくり上げた。
「誕生日はね、えーと十二月八日かな」
「じゃ、射手座だ」

すかさず清さんがそう言ったのは意外だった。
「清ちゃん、年寄りが星占いに興味を持つなんざ、ちっとばかり不気味だぜ」
元治の気持を代弁するように、六さんが目を丸くした。
「いいじゃないか、乙女チックで」
清さんがつらっとして言い放ったので、六さんの方がたじろいだようになった。
「乙女チックねえ、今度はそっちが片仮名かい」
元治は、親方に向って外人のように両手を広げて見せた。親方が同じ仕種を返し、その向うでおかみさんが苦笑いをした。
「元ちゃんよ、このところ清ちゃんは少しばかり訳ありでね」
六さんがそう言って目を覗き込むと、清さんは蠅でも払うような手つきで、その視線をさえぎった。
「へえ、訳ありってこっちの方なの？」
元治が小指を立てると、清さんはそれを自分の手で包み込むようにしてから、あたりをはばかる表情を見せ、
「よしなよ元ちゃん、人聞きの悪い」

あまり不愉快でもなさそうに言って、元治の手をポンと突き放した。そのあと左手を畳へ突いて、宙に泳がせた右手をすっと引きしなをつくって見せたあたりに、清さんの弾んだ気分がただよった。

「ところで、今度はどうする？」

六さんが、それはさておきという真顔で言った。清さんの窮地を救っているようでもあり、艶が清さんにだけからんだのだからというふうでもあって、あいかわらず六さんが話題を切りかえる理由は読みにくかった。

「今度って……」

あいまいに聞き返すと、六さんは小さい舌打ちを放ってから、

「決ってるだろう、芝居せんべいだよ」

ぐいと胸を反らして言った。

「ああ、そろそろ新狂言だねえ」

清さんが、目をしばたたいた。

「その言い方は何だか乗り気がなさそうだが、清ちゃんもちろん行くんだろうね」

「新狂言はいつになるのかねえ」

「何を言ってるんだ、芝居せんべいは毎月一日が初日って決ってるじゃねえか」
「六ちゃん、今度は元ちゃんと行って来たら……」
「おい、冗談じゃねえぜ。みんなが揃わなきゃ、ルパン先生はよろこばねえよ。おい元ちゃん、おまえも行くんだぜ」
「俺は大丈夫だけど……」
「じゃ、決めたよ」
六さんは、やっと二人の気分をあやつったというふうに息を吐き、意味もなく宙の一点を睨んでいる。こういう芝居もどきは、六さんがすでにすっかり芝居せんべいの世界へ入り込んでいる証拠だった。そんな六さんの姿が、そろそろ落ちかけている陽の光をかろうじて通した障子を背景に、切絵みたいにあっけらかんとした無邪気さをただよわせていた。
「あたしゃ、この時間のここからのながめが好きでねえ」
清さんが障子を開け放つと、六さんはつまらなそうに気取ったポーズを解いた。窓枠の向うの大横川の水が、どんよりとした鏡面のようだった。
「いやあ、やっぱり下品だ」
清さんが、いまさらながらおどろいたといったぐあいに、大きく目をみひらき唇をゆが

めて、しきりにうなずいていた。
「下品って何ですか……」
「元ちゃんのアパートさ、ほらあの屋根の赤いやつ」
「あれ、赤から焦茶に変えたらしいですよ」
周囲の評判を気にしてか、マンションの真っ赤な屋根がいつのまにか少し地味になったのは、つい最近のことだった。
「変えても、ほら同じだよ」
「そうかなあ……」
「いや、悪口言ってんじゃないよ、下品でいいねえって話さ」
「下品でいいねえ、ですか」
「人間、悪趣味を楽しめなきゃ駄目」
「はあ……」
「でもね、悪趣味を楽しめりゃまた大したもんってわけでね、人間ってのはむずかしい」
「……」
「こいつは、あたしがこの六ちゃんをずっと見てきて覚えたことなんだがね」

「元ちゃん、清ちゃんは近ごろちょいと理屈っぽくなってるから、適当に聞いといた方がいいよ。まともに聞いてりゃ、俺がまるで悪趣味の権化じゃねえか」
「その通りだからしょうがないよ」
「何しろね、清ちゃんが理屈っぽくなったのはたしかなことだ」
「やっぱり、これのせいですか」
元治がまた小指を立てたので、清さんは拳をふり上げる真似をしてから、ちょっと照れたように笑ってうつむいた。
(清さん、本気かな……)
まさか、という気もしたがあり得ぬことでもないとも思った。清さんは、若い頃は遊び人と言われた人のようだ。六さんの遊び心は芝居で燃焼したが、清さんは遊びを現実の生活の中で満喫してきたらしい。だが、何しろその清さんももはや七十に近くなっている。その年で新しい相手ができたとしても不思議ではないが、六さんの影響で芝居ごころを覚えはじめたというけはいもあった。しかし、その芝居にもまた現実が影を落しているようでもあり……元治は二転三転する思いをかき消した。
(さすがに陽が短くなったな……)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.